



第15号

令和8年3月1日
発行 須高地区保護司会
編集 総務部



令和8年1月17日 須坂市シルキーホール

「バトン」を繋ぐ

長野刑務所長 中道 徹



須高地区保護

司会の皆様

は、日ごろから

矯正行政への深

いご理解と多大

なご協力を賜り、深く感謝を申し上げます。

さて、令和七年六月一日、刑法が約

一〇〇年ぶりに一部改正され「拘禁刑」

が始まりました。受刑者一人一人の特

性に応じ、きめの細かい処遇を行うこ

とを目的としています。

これまでの「懲役刑」で義務であつ

た刑務作業が「拘禁刑」下では義務で

はなくなり、一人一人の受刑者が必要

としている各種作業や指導、そして教

育をより柔軟に行うことができるよう

になりました。

また、刑務官、法務教官、心理専門

職だけではなく、医療従事者、社会福

祉士、作業療法士、就労支援専門官、

福祉専門官、処遇カウンセラーなど、

多職種により、それぞれの専門的知見

を活かし、連携して質の高い処遇を行うことが求められています。

一方で受刑者は、当然のことですが、

刑期が終了すれば、「社会の中」に帰っ

ていきます。

刑務所では様々な作業や教育・指導

等を通じて受刑者がスムーズに「社会

の中」に帰り、健全な社会の一員とし

て生活することを目指していますが、

我々が処遇できるのは「塀の中」でし

かありません。受刑者が一歩、「社会

の中」に踏み出すと、我々はそこから

先は一切関与することができません。

そこで我々は、「社会の中」で彼らの

立ち直りを支えてくださる保護司の皆

様に思いを託して「バトン」をつなぎ

ます。保護司等の皆様方におかれまし

ては、日々、様々なご苦勞があること

と思いますが、再犯防止という共通の

ゴールを目指して一緒に前進していく

所存です。

我々は、これからも皆様方につか

りと「バトン」を手渡していきたいと

思いますので、引続きご支援を賜りま

すようお願い申し上げます。

須高地区保護司会

会長 水澤 弘行

保護司のやりがい



野平芳一前会長の後を受け、昨年五月の総会で会長となりました。皆様のご協力のおかげで活動が進

められ、ありがたいことです。

さて、保護司の仕事の一つに、罪や非行を犯して保護観察になった少年や成人の更生指導があります。指導の基本は面接で、特別な資格や技術がある訳ではなく、顔を合わせて話す面接が主です。相手の話しに耳を傾け、励まし、ささいなことでもできたら褒め、見守り、寄り添います。多くの対象者は、成功体験が乏しく、叱られてばかりで褒められたことがなく、自信がなく、人を信頼できません。人に大事にされ支えられる経験が乏しい中で生きるを得なかつたのです。

保護司は、面接場所に約束どおり来た等のできたことを褒めます。面接の約束を忘れられたり、すっぱかされたりもしますが、その都度、待つ人の気持ち、生活のルールを守る大切さ、信頼される重要性を根気よく話し論じます。それがいつか心に届き、保護司の助言に耳を傾け、生活の安定につながると、逆に何ものにも代えがたい喜びを感じます。

終わりに、現状は保護司のなり手が

不足しています。昨年末、その解消等のため、保護司法が改正されました。今後、保護司の担い手確保への支援が進むことを願っています。

須高地区更生保護女性会

会長 花岡 君江



私たち須高地区更生保護女性会は、毎年卒園する子どもたちにプレゼントを贈っています。子ども

もたちが、犯罪や非行のない明るい社会の中で育つよう、地域ぐるみで子どもたちを見守り、育てるといふ子育て支援活動や、更生保護施設の見学を計画しました。今年度は、松本市にある少年施設「有明高原寮」に行きました。五人ほどの入所者でしたが、グラウンドで元気に野球をしていました。講堂には、文化

祭の書道や絵画などが飾られていました。お家の人への手紙には心打たれました。十年ほど前に行った時には、も

も



鐘の鳴る丘で

あったように思いましたが、明るい校舎に変わっておりまして。直接、子どもたちに会うことはできませんでしたが、音楽室にはギターやドラムが置いてあり、現代の子どもたちだなあと思いました。保護司会の皆さんとも一緒に見学させていただきました。

また、公立保育園・私立保育園・幼稚園など22園に、役員が「座布団ゴマ」を作り、「鉛筆」と一緒に贈りました。「卒園おめでとう」ございます。もうすぐ小学校入学ですね。お友達と仲良くしてね。学校の行き帰りには、交通事故にあわない様にルールを守ってね」などと、やさしく声がけしています。

それぞれ園の計らいで、お礼の「歌」を歌って、私たちの心を和ませてくれました。そして、早速「座布団ゴマ」を回し始めて大喜びでした。きずつきし 心の子らを

いだしよせる ははともなりて
いつくしまなむ

「更生保護制度施行十周年にあたり、昭和三四年九月、皇后陛下(皇淳皇后)より、更生保護関係者に賜った御歌(みうた)」

総会の折には、厳かに、女性会の目的を心にこめて、歌い始めます。

終わりに、昨年一月一二日長野市のホテル国際21において開催された第二六回長野県更生保護女性会の集いに、長年の活動により表彰された受表彰者を紹介します。

○長野保護観察所長感謝状
竹内ちさと

○長野県更生保護女性連盟会長表彰

花形多美子 岩崎章子 島田女久美
田中久美子 市村良江
受彰おめでとうございます。

須高地区更生保護 協力事業主会

会長 中村 正



本年度、当会は雇用主としての役割を改めて見つめ直し、就労支援の充実に重点を置いた活動を行ってまいりました。

九月には上田市で開催された雇用主研修に参加し、具体的な雇用方法としてコレワークや日本職親プロジェクトについて学ぶとともに、参加者同士の意見交換を通じて、実践的な支援のあり方について理解を深めました。

また一月に開催された就労支援フェスタでは、就労を希望する方々と直接向き合う機会を得ました。働くことへの強い意欲に触れ、就労支援が社会復帰と再犯防止に向けた重要な一歩であることを改めて実感しました。

そのほか、社会を明るくする運動への協力や、更生保護大会をはじめとする関係行事への参加を通じ、地域における理解促進と連携強化にも努めてまいりました。

今後も事業主会として保護司の方々との協力し、再犯防止に取り組み、一人ひとりの再出発を支える取組を継続してまいります。

令和七年度須高地区作文コンテストが実施されました。優秀作品に選ばれた黒岩美羽さん、沓掛心花さん、内堀 桃さんの作文を紹介します。(審査結果5面)

小学生の部 須高最優秀賞

社会を明るくするために私ができること

豊洲小学校五年

黒岩 美羽



夏休み中、テレビで戦後八十年のニュースを見ました。一九四五年に終戦した第二次世界大戦から八十年経ったのが今年です。戦争中は日本は広島県と長崎県に二回原子爆弾が落とされてしまいました。その原子爆弾により、今でも苦しんでいる人がいることを初めて知りました。終戦記念のスピーチでは「原子爆弾を作ったり持ったりしてはいけない。」「原子爆弾を作ったり持ったりしてはいけない。」「とうつたえかける人のすがたを見て私は、平和な明るい世の中になってほしいと思いました。明るい社会にしていくために、自分が身近なところから実せんしていきたいと思いました。私の身近なかん境を明るくするために大切なことは「話し合い」だと思います。「話し合い」が大切だと思ふ理由について書いていきます。

「話し合い」が大切だと思ふ理由の一つ目は、私の家族での話し合いの経験からです。私の家族ではいつも夕飯のときに、それぞれのその日の出来事を話しています。それぞれがそのとき感じたことを伝え合うことにより、みんなて笑ったり、ときには自分だったらどうしたかを考え合ったりしています。

私は、家族でいろんなことを話しながら夕飯を食べるのが大好きです。自分が思っていたことを家族に話すと、気持ちやすつきりして思っていたことが整理できます。

このように、家族で伝え合っているからこそ、おたがいから元気をもらって、家族と過ごす時間はより明るいものになり、元気な私でいられます。

「話し合い」が大切だと思ふ理由の二つ目は、私の学校でのクラスの経験からです。私のクラスはいつでも元気がいっぱいです。休み時間もみんなと一緒にいたりして遊びます。授業中もグループ活動でみんなて話し合いをしています。

峰の原自然体験学習前には、グループごとに話し合うことがたくさんありました。クラスのためあてを決めたり、各係ごとに仕事の分たんを決めたりしました。この話し合いの活動を通して大切だなと思つたことは、ふだんからクラスで意識している「う・め・ら・い・す」です。友達の話にうなずき、目を見て、ラストまで、一生けん命、スマイルで話し合いをしたことで、準備がしっかりできました。そして、峰の原自然体験学習はとてもじゆう実し

たものになりました。このように、クラスで話し合えることは、友達や先生をおたがいに大切に思っているからこそできるのだと思います。

家族の中でもクラスの中でも、おたがいに「話し合う」ことで、みんなが明るくすごせているのではないかと思ひます。家族もクラスも小さな社会だと思ひます。その小さな社会での話し合い、伝え合う経験の積み重ねが元気な自分を作り、たがいを思いやり、より良い社会を作っていく土台になっているのだと思ひます。

みんなが明るく生活することができるよう、これからも「話し合う」ことを大切にしていきたいです。

中学生の部 須高最優秀賞

知ろうとする勇氣

相森中学校三年

沓掛 心花



「助けて」と言えない人がいる。誰にも気づかれず、一人で傷つき、声を上げることさえ出せずにいる。し、周りは気づかない。いや、気づこうとしない。無関心が、今日も誰かを追い詰めている。犯罪の背景には、「知らなかった」や「無関心」という言葉があると思ふ。犯罪を起こした人には、愛情を知らず、理解されなかった過去がある人もいふ。かつては助けが必要だったのかも

しれない。私たちは、犯罪そのものでなく、それを生み出した社会や無関心な自分たちにも目を向けるべきではないだろうか。また、インターネット社会に生きる私たちは、画面の向こうの相手を「知らないまま」言葉をぶつけてしまう。流れてくる情報の中で、誰かの苦しみに触れても、いいねやスクロールだけで終わってしまう。「自分じゃなくてよかった」と思つた瞬間、無関心は生まれる。私はそんな社会を、絶対に変えたい。

私がそう感じる事ができたのは、ある身近な存在がきっかけだ。私には、二十二歳の兄がいる。まず、兄に会った人はほとんどが兄の真似をするか、馬鹿にしたように笑い、遠ざかっていく。知的障害を持つている兄は常に誰かが一緒にいなければ、生きていけない。私たちが当たり前のように出てくることを兄は出来ないし、もう大人なのにも関わらず、十指す十ができない。一人で寝ることもできない。しかし、私は兄をよく知っている。私が赤ちゃんの頃からそばにいて、十五年間ずっと一緒に過ごしてきた。私には、兄は優しさや一生懸命のたまものだと思つている。毎回、食べ終わった家族のお茶碗を何も言わずに片付けたり、自分が出来ないことと自覚していることを、出来るようになるまでずっと、ずっと練習していたりする。でもその姿を知らない人たちは、いかにも知つたかのように偏見で作られた兄をただ違うからと言つて避けたり、馬鹿にしたたりする。そうした態度に、兄は何も言わないが、確実に伝わっているのだと思ふ。そうした、知らないからこそ勝手に作り上げた偏見でできた兄に接する態度は兄をどれだけ傷つけているか。そんな事実を目を向けようと思ひない人が多いことに、とても悲しくなる。し

かし、私は兄が馬鹿にされていても、その場から離れたり、こうやって作文にして伝えることしか出来ない。馬鹿にしてくる人たちに言い返す勇気がない。私も「見て見ぬふり」をしてしまっている。「見て見ぬふり」をすることは、決して特別なことではない。多くの人々が、誰かに傷つけられている場面に出席しても、何も行動を起こせないことがある。私自身、兄が周囲から馬鹿にされているのを目の前にしながら、声を上げることができなかった。心の中では止めたいと思っていたのに、行動には移せなかった。なぜなら、私もまた、他人からどう見られるかを恐れていたからだ。自分が「普通ではない」と思われたくなかった。その感情は、恥ずかしく、家族として情けないものだ。しかし、この経験を通して私は気がついた。「見て見ぬふり」は誰にでも起こり得る弱さであり、それに気づいたときにこそ、人は変わるチャンスを得られるのだと。兄の隣に立つことで、社会の冷たさに気がつくことが出来た。もし、兄が兄じゃなかったら、今も私は見て見ぬふりをそのままにし、この作文を書いていることもないだろう。

心を確実にすり減らす。私は兄の隣にいても同時に、「知ったからこそ見える景色」があることも知った。私たちのすぐそばには、今まで知らなかったこと、見えなかったこと、見ようとしてこなかったことであふれている。だから私は、誰かが傷ついていることに気づける人でありたい。たとえ、声にできなくても、その痛みから目をそらさない人間でいたい。優しさは、知ろうとすることから始まる。たとえ完璧に理解できなくても、知りたいという気持ちで、人をつなぐはずだ。一人一人の無関心がなくなれば、社会は確実に変わる。知ろうとする勇気が、社会を明るくする一歩になると、信じている。



中学生の部 長野県優秀賞
幸せのバトン
 墨坂中学校三年
内堀 桃

私はこの経験をを通して、「知ろうとする」とは優しさの始まりなのだと思いついた。人は、自分とは違うものに出会うと、理解するよりも先に線を引こうとする。けれど、その線を越えて、知ろうとする勇気を持てたとき、そこに本当の優しさが生まれるのだと思う。今の社会には、「知らないこと」を恥とする空気が、「わかった気になれる」情報であふれている。スクロールひとつで誰かの叫びを通り過ぎ、「自分じゃなくてよかった」と思った瞬間、思いやりは消えてしまう。気づかないふりは簡単だ。だけど、それは誰かの

で最多の五百二十九人となった。最近の十年はSNSの流行で急激な増加になってきたのだという。生きていく事は楽しい事ばかりではない。こんな時代に逃げ場所すら限られた狭い世界で生きる子ども達が自分の力で何ができるのだろうか。

心に残っている言葉がある。私が中学二年生だった時、退職された校長先生の最後の校長講話である。「生きていく・・・ということには誰にでも与えられている権利ではありません。もちろん義務でもありません。でも、人は選ばれて生まれてきたのだと信じたい。人の幸せって、前方からやってくるのではなく、今日という日を一生懸命、前へ転がって生きていくことで得られるものなのです。精一杯転がって生きていること自体が幸せなのかもしれない。幸せはいつも自分の心が決めるのです。しかし、人生ってうまくいかない事もあるから、肩の力を抜いて「なるようになるさ」くらいの気持ちで過ごしてほしいなという気持ちも片方ではあるのです。『そんな校長講話だった。校長先生は教員人生の最後に、二十一世紀に生きていく私たち生徒に言葉を残してくれた。SNSの流行により「ことば」の影響力が強い時代となった。どんな言葉を選択し誰と何を共有するのか。友達とのつながりが安心となったり、怖さとなつてくる時代。「ことば」が人に勇気や希望をあげる事もできるし、人を傷つけることも簡単にできてしまう。そんな時代が子どもの自殺者を増加させたのかもしれない。

私は最近考えることがある。私たちは産まれた瞬間にバトンを持って産まれてきて、そのバトンを次に渡す為には人生を走っている気がする。時には嫌なバトンを渡されることもあるけれど、

ど、きつと走り続けていけば幸せなバトンがやってきて、それを次に渡しなから人生はぐるぐる回っているのではないのかと。命もその中一つのバトンで、でも命のバトンだけは自分で捨てたらもうそれを拾える自分もいなくなってしまうという事。結局、目に見えない嫌なバトンも幸せなバトンも、命のバトンも、自分じゃなく誰かに渡されるもの。私たちは人の言葉や態度に傷つけられて、でも反対に癒してくれるのも人なんだ。こんなちっぽけな私に沢山の人を救うことは出来ないかもしれないけれど、私は人を傷つけたくはないし、自分で自分を否定することもせず、どんな自分も認めて前に転がって生きて幸せを感じていきたいと思う。

私はこの作文をきっかけに過去の自分の辛かった出来事を思い出した。同時にそんな時にいつでも助けてくれた人達の優しい言葉があった事にも気がついた。今の私にできる何かを探したら、誰かが受け取ってしまった「嫌なバトン」を私が「幸せのバトン」に換える事なのではないか。その為に私が辛い時、私がしてもらったように隣で寄り添い、一緒に前に進み、言葉や行動で誰かを支えられる自分になることだ。

これからの未来を明るい社会にする為に「幸せのバトン」を次に渡そう。せめて、私と同じ世代の人が、辛いバトンを握ったまま自ら命のバトンを投げ出すような社会にならない為に。走り続けていけば、あなたを大切に想っている人から、「幸せのバトン」が絶対来る事を私は伝えたい。

九月一日。私が生まれた日。自分が生まれたこの日も何だか意味があるように好きになれた気がしてきた。

法務大臣表彰を受彰して

保護司 野平 芳一



令和七年一月二四日、飯山市文化交流館（なちゅら）での「第70回長野県更生保護大会」において「法務大臣表彰」の栄に浴し、これは、須高保護司会の皆様を代表して頂いたものと思っております。

法務大臣表彰は保護司在任期間三〇年が一つの基準と聞いており、平成二一年五月に就任して半分足らずでの表彰に申し訳なく思っています。

保護司会会長を引き受けた一昨年の五月、滋賀県で発生した保護観察対象者による保護司の殺害事件が発生いたしました。このままの環境では、須高地区においても対岸の火事とは言っておれないとの思いで保護司の活動環境改善策を模索している中で、首長及び長野保護観察所の大谷所長の絶大なるバックアップで保護司の負担が大きく改善されました。（改善の内容は様々な機会でご報告されており省略）こうしたことが評価され表彰に至ったものと感謝しています。（大谷所長の私への置き土産かな？）

去年、今年と自己推薦で二名の保護司が誕生しました。一步先んじている

須高保護司会のさらに一步先んじた事例だと思っています。

私に残された期間はあと二年。私かなすべき大きな課題は保護司に共感する人が進んで保護司になっていただけ環境づくりだと考えています。

新任保護司として

保護司 應永 興宣



令和五年度より保護司を拝命致しました應永興宣と申します。非才浅学の身であります。非才浅学の身であります。

以前から任用されたと理解しております。場から任用されたという理解しております。以前から長野刑務所の教誨師としても活動しております。グループ教誨を行っております。「何故この方が罪を犯してしまったのだろうか」と思うことがあります。人は環境と縁によって人生のあり方が変わってしまうこともあるのだと感じることがあります。「どう思っても教誨師としてしっかりと対応をして下さいね」と教誨師に就任した頃に大先輩から助言を頂きました。その言葉を胸に務めています。昨今、社会のあり方は、より一層深刻になっていきます。担当になった方には、人としてよく話を聴き、穏やかな気持ちで努めたいと思います。就任したばかりで分からないことが多々あります。ご指導のほど何卒宜しくお願い致します。

新任保護司として

保護司 中村 公彦



令和六年一月より保護司を拝命いたしました中村公彦と申します。地元において小売業を生業として

し、大変多くのお得意様に育てていただき現在に至ります。今まで全く携わった事のない活動に対し、私が務まるのか大きな不安を感じながらではありますが、何とぞよろしくお願ひ申し上げます。

仕事をお請けしたなら親切丁寧そして誠実にと同様に、この職務をお受けしたならば積極的に研修会等へ参加させていただき、少しでもご迷惑をお掛けすることのないよう努力を重ねたいと思っております。すでに先輩保護司のご教示をいただきながら担当させていただきます。先ず、先輩保護司の子にもしっかりと歩み寄り、心身ともに健康善良に進める面接を行なうて参りたいと思っております。仕事上何かと荒れた状況のご家庭にも上がらせていただきますが、この任を機に常日頃から優しく穏やかな気持ちで過ごしていける力の一つになればと思っております。先輩保護司・関係各位の皆様にはお世話になる事だらけかと思いますが、どうぞよろしくお願ひ申し上げます。

第775回社会を明るくする運動 第17回須高地区作文コンテスト 審査結果

◎須高地区

◆小学生の部（応募総数10点）

- ▽最優秀賞 黒岩 美羽（豊洲5）
- ▽優秀賞 業田 杏菜（豊洲4）

- ▽入選 西澤 可純（日滝4）
- 浦野 碧人（高山6）
- 志村 加奈（旭ヶ丘6）
- 國本 幸円（旭ヶ丘5）
- 渡邊 昂（旭ヶ丘5）

◆中学生の部（応募総数90点）

- ▽最優秀賞 杏掛 心花（相森3）
- ▽優秀賞 近藤 柚奈（東3）

- ▽入選 高村友莉那（小布施2）
- 内堀 桃（墨坂3）
- 西原里緒菜（常盤3）
- 西川ひかり（常盤2）
- 浦田 英紀（相森2）

◎長野県

- ▽優秀賞 内堀 桃（墨坂3）
- ▽入選 杏掛 心花（相森3）



